

## 真言・陀羅尼の実際

### 1 はじめに

空海入唐の本当の動機は、梵字・悉曇すなわち今でいうサンスクリットの習得と真言・陀羅尼の理解会得だったと言うのに、私はこの頃躊躇しない。

空海は『三教指帰』を著わす24歳の頃までに、大乘仏教の精髓であった唯識(法相)・中観(三論)・華嚴をほぼ脳裡に収めたほか、のちに大成する空海密教の論拠として重きを置く『釈摩訶衍論』(密典)までも見ていたフシがあり(『三教指帰』「生死の海」「大菩提の果」)、入唐までの空白の七年に『大日経』の密教思想も読解力のおよぶ範囲はかなりの理解をしたはずである。そうでなければ、長安での実質一年半で、金剛・胎蔵両部の大法(三摩地法)とその奥義を修め、かつ大量の顕密両教の経典・儀軌類(「御請来目録」)を選んで持ち帰れるはずがない。

しかし、『大日経』にはどうしてもわからない部分があった。それが梵字・悉曇であり真言・陀羅尼だった。空海はすでに、南都のどこかで、後年共に第十六次遣唐使船で入唐することになる靈仙などと梵字・悉曇(当時のサンスクリット)を不首尾ながらも学んでいたはずである。空海といい靈仙といい、長安醴泉寺の般若三蔵のもとでサンスクリットの実力を充分なほどにつけている。

梵字・悉曇(当時のサンスクリット)ができなければ、『大日経』の具縁品第二以下にはわからないところが出てくるほか、真言・陀羅尼の師資相承を必須とする金・胎両部の大法や諸尊の三摩地法の受法に事欠く。梵字・悉曇がわかっていなければ真言・陀羅尼は「空念仏」になってしまう。口密が虚妄であれば真の三密瑜伽にはなりえない。

さらに、東シナ海を渡る遣唐使船団が幾度も海の藻くずとなっていた空海の当時、文字通り生死をかけた空海渡唐の最大のモチベーションは何であったか。それは、どうしても唐に渡らなければ習得・会得できない問題、日本つまり南都や平安京では不可能な課題、その解決でしかありえない。それが、梵字・悉曇の習得と真言・陀羅尼の理解会得だったというのが私の見解である。

真言・陀羅尼を、空海は如来の秘密語(『般若心経秘鍵』)と言った。空海密教においては、真言・陀羅尼は法身である大日如来が自ら(自内証)を自ら説く説法のコトバであり、真如(実相)であり、「果分可説」の原理である。空海はヒンドゥーの神々への賛歌や祈りのコトバ「マントラ」に祈りの内容を顕在化する不思議な力(シャクティ)の内在を言うインド伝統の言語観を知っていて、密教のなかに採り入れられたそれをさらに高いレベルに止揚した。真言・陀羅尼は空海密教にとって必要欠くべからざるキーコンセプトであり、重要なメソッドである。

空海が如来の秘密語といった、その真言・陀羅尼とはいったいどんなものか。

一般によく耳にする不動明王の真言「のうまくさんまんだーばーざらだんせんだんまーかるしゃーだーそわたやうんたらたーかんまん」や、空海がよく行じたという虚空蔵求聞持法の虚空蔵菩薩の真言「のうぼうあきゃしゃぎらばやおんありきゃまりぼりそわか」、あるいは『般若心経』末尾の「ぎゃーてーぎゃーてーはーらーぎゃーてーはーらそーぎゃーてーばーじーそわか」など、あるいはまたチベットの人々が日常よく口にする「おんまにばどめふーむ」、その同類の光明真言「おんあぼきゃーべいろしゃのーまかぼだらまにはんどまじんばらはらはりたやうん」など、みな昔のサンスクリットの発音のまま唱える仏界(法界)言語である。私はこれを宇宙語と言っている、仏と人間とが交信感応し合うデジタル信号に似た双方向の通信言語の意味である。

古来、密教経典を翻訳する際、真言・陀羅尼の部分はそれぞれの国の言語(母国語)に翻訳をせず、サンスクリット音のまま音訳されてきた。とくに、漢訳が盛んに行われた唐代の中国においては、中国に渡来したインド僧も、西域出身の訳経僧も、サンスクリットに通じた中国僧も、サンスクリット音に適する漢語をあて、さまざまな記号まで用いて正しい発音を工夫した。

一方また、漢語表記を用いずに真言・陀羅尼を梵字のまま書写・表記したり、サンスクリット音で読誦することもよく行われた。今私たちの前に、漢語表記と梵字表記の真言・陀羅尼の2種類あるのはそのためである。

わざわざそんな方法がとられたのは何故か。それは、周知の通り、真言・陀羅尼が特別な言語だからである。日本にも古来、人間のコトバのなかに不思議な霊威がひそんでいると考える「言霊(コトダマ)」の思想があるように、真言・陀羅尼もコトバそのものに霊力が宿ると見なされた言語であり、また人間(俗なるもの)と仏(聖なるもの)とが交信感応する高次元の言語だからである。

男女の性力(シャクティ)を信仰化したタントリズム(「産み出すもの」の信仰)流行下のヒンドゥー文化社会でインドの仏教も密教化し、往古バラモン僧がヴェーダの賛歌を神々に奉げたように、密教徒たちは口にマントラ(真言・陀羅尼)を唱え、諸仏諸尊に呼びかけてその功德を讃え、霊力の利益の顕現を祈った。

インドの密教徒がしたように、密教を受容したどの国の密教徒も自らが誦持する真言・陀羅尼に不可思議な霊力を見ようと、この極めてインド的な言語宗教の伝統を重んじた。サンスクリット音で真言・陀羅尼をそのままに読誦する伝統は、インド密教の言語宗教としての精髓を広くアジアに伝える方法にもなったのである。真言・陀羅尼は単語の連結から成る短文であるが、その単語(多くは複合語(コンパウンド))は名詞も形容詞もみな女性形(産む力)をとっている。

そのような事情から、真言・陀羅尼を日本語に和訳することはある種タブーなのであるが、今日サンスクリット語学が仏教系大学などで講じられ、難解な真言・陀羅尼の和訳を試みる学者として少なくとも、また今は情報公開の時代、秘密事相の世界でさえも序々に公開の傾向にあり、さらに本サイトは不特定多数の閲覧者に広く空海や空海密教を情報化して伝えることを目的としている関係で、敢えて私教版ながら不備を承知でいくつか真言・陀羅尼の和訳を示すことにした。

専門家の間では、仏教経典のサンスクリットを仏教梵語といい、インドの叙事詩や説話あるいはバラモン教聖典等の整備されたサンスクリットと区別をしている。この仏教梵語で書かれた仏典のサンスクリット文(梵文)を和訳するのは、実は容易なことではない。それでも私たち日本人は何とか漢字が読めて漢文を読み取れる方法があるから、漢訳仏典(『大正新脩大蔵経』など)を参考資料としてまずまずの和訳ができる。

それは、それで幸いなことなのだが、実はこの漢訳仏典の訳語に頼る和訳法が常態化していて、その結果和訳とは名ばかりで実質は漢訳と変わらない難解で非日常の日本語訳が、仏教研究の世界では罷り通っている。

私は、梵文を直訳でいいから原文に忠実に和訳することを、学生時代に恩師から教えられた。なので梵文和訳に当っては、インド文典でも仏典でも真言・陀羅尼でも、まず単語の原意と用例を辞典で確認し、文法や修辞をあこれ考慮しながら英語から(自分なりの)日本語に変換(直訳)をする。仏典や真言・陀羅尼の場合には、漢訳語には絶対に飛びつかない。先学の訳語訳文も見ない。見てしまえば、それが頭を支配し、翻訳作業のつきつめが甘くなり、結局自力で和訳することにならないからである。漢訳や他人の訳語訳文を参照するのは、ひと通り訳したあとである。

私の和訳が原文に忠実かどうかはわからないが、原文に沿った直訳ではある。恩師に教えられたのは、まず直訳、であった。直訳にしても、原語・原文の吟味のほかに仏教術語や仏教梵語の用例やクセが頭を駆けめぐっていなければならない。真言・陀羅尼の場合はさらに、複合語(コンパウンド)の文法・修辭に苦勞する。直訳さえ難しい。

## 2 三陀羅尼和訳

真言・陀羅尼の和訳の最初に、真言宗系でよく唱えられる基本の三陀羅尼(「佛頂尊勝陀羅尼」「宝篋印陀羅尼」「阿弥陀如来根本陀羅尼」)を紹介する。和訳にはまちがいのもあるし、自信のない箇所もある。だが当らずとも遠からずということもあり、陀羅尼全体のイメージをつかむ程度にはお役に立つと思う。

参考までに、『常用陀羅尼と諸真言』(増補改訂版、真言宗智山派宗務庁刊)の和訳を付しておいた。思いついた注記や私見も書いておいた。私の私訳(ほぼ直訳)と大学匠の和訳のちがいを見て、仏教梵語の翻訳に「いろいろある」現実も少しお分かりいただけるかと思う。

なお、近年真言系の研究者によって種々の真言・陀羅尼の和訳が公表されている。うなずけるものもあるし、首をかしげるものもある。和訳を公表はしないが、相当に吟味された私訳を試みておられる隠れた研究者もおられる。関心のある向きは、金岡秀友訳(『仏典』/筑摩書房)や頼富本宏訳(『現代密教講座』/大東出版社)をご覧になるとよい。両先生の訳も、田久保周譽先生の訳も、ここには敢えて載せていない。

### 佛頂尊勝陀羅尼 (uṣṇīṣa-vijaya-dhāraṇī ウシュニーシャ・ヴィジャヤ・ダーラニー)

「仏頂尊」とは、仏陀の頭頂部分の「肉髻」(uṣṇīṣa)の功德、つまり「仏智」をそのまま尊化したものである。「仏頂」が、仏のなかの「最勝尊」といわれたり、仏智のなかの「最上」と称えられるのは、仏三十二相好中第一の「頂上烏瑟膩沙相(uṣṇīṣa-sīraskatā, uṣṇīṣa-sīraṣa)に当るからと考えられる。

『大日経疏』十巻には、「一切仏頂とは謂く、十仏刹土微塵数仏の頂なり。頂はこれ尊勝の義、最も(仏)身の上にあればなり。即ちこれ十八不共法の別名なり。この本尊の形像は一に釈迦如来の具足せる大人之相に同じ。唯、頂の肉髻のみ。」とあり、形状は仏陀の頭部の「肉髻(もとゆい)」で、仏陀の内実である仏智を表象し、それを対象の「尊」として観想し尊んだものと思われる。

その種類は、三仏頂、五仏頂、八仏頂、九仏頂、十仏頂があり、例えば『大日経疏』には、三仏頂(広生仏頂・發生仏頂・無辺音声仏頂)と五仏頂(白傘蓋仏頂・勝仏頂・最勝仏頂・光聚仏頂・除障仏頂、胎藏マンドラ/釈迦院に置かれる)を説く。

仏頂尊勝陀羅尼は、この「仏頂尊」を讃え「仏智」の利益を祈るもので、罪障消滅・延命長寿・災厄消除の利益があるとされ、インド・西域・チベット・中国・日本で流通した。典拠の儀軌は9種類であるが、真言宗系では『尊勝仏頂修瑜伽法儀軌』二巻(善無畏訳)を用いる。

### ●の(な)うぼう ばぎやばてい たれいろきやはらちびしゆだや ぼだや ばぎやばてい

Namo bhagavate trailokya-prativiśiṣṭāya buddhāya bhagavate

(智山の悉曇からの校訂ローマナイズ)

<梵文の読み>ナモー バガヴァター トウライロークヤ・プラティヴィシシュターヤ ブッダーヤ

バガヴァター

<智山の和訳>三界の最勝尊なる仏世尊に帰命したてまつる。

<筆者の直訳>敬すべき、三界で最も勝れた、仏陀(である)世尊に頂礼したてまつる。

※智山(『常用陀羅尼と諸真言』(増補改訂版))の悉曇からの校訂ローマナイズには、諸処誤表記が見られる。悉曇そのものに誤写誤記があるのは梵語仏典の宿命で、現代の訳者は複数の悉曇や漢語に音訳されたテキスト(大正新脩大藏經所収のものなど)を比較対照して校訂を行うことが求められる。

※「Namo」は、語根が Namas。原意は「挨拶(する)」「礼拝(する)」「敬礼(する)」であるが、漢訳の仏典はこれに仏世尊等への「皈依」「帰命(頂礼)」「稽首(礼拝)」「帰敬」という訳語をあてた。

※仏典やその注釈書の冒頭にはかならず仏世尊等に対する「帰敬偈」がある。もとはヒンドゥー聖典に倣ったものであろう。これは、インドの宗教聖典特有の一種の儀礼的なものだから、あまり厳密に翻訳することでもないと思われる。私たちが用いる表白の冒頭に「敬って真言教主大日如来…、～尽空法界一切三宝に日して白さく」とあるのも帰敬部分にあたる。

※原文には、直訳の通り、「尊」等の仏格を言い表す語はないが、インドの仏典では「聖なるもの」を言い表す名詞や形容詞や過去分詞にその意味が含まれていることがしばしばである。

※<智山の和訳>に「最勝尊」とあるのは、この陀羅尼の内容からしてあり得べき訳語だが、原語に「尊」格の意味はない。漢語を依用した意訳は、しばしば原文のインド的原意から離れる危険性がある。

サンスクリット原文を、訳語の予見なしに、文法や修辞を読み取りながら忠実に直訳する労を省きすぐに漢訳などに飛びつく、そうした翻訳態度が実は日本の近代仏教学の中心をなす文献研究の底流にあったことは、学界誌の学術論文を見れば一目瞭然である。漢訳の絶妙なことはよくわかる。だから正確を期すために漢訳に頼るのもよくわかる。しかし、それではせつかくインド言語の文献をテキストにしながらか結局は中国の言語概念でインド仏教を理解するという矛盾に陥る。とくに真言・陀羅尼を和訳する場合、マントラなどのインドの宗教的言語概念から離れることのないよう気をつけなければならない。

※宗祖大師は、この陀羅尼全体を十の分科に分けている。この「帰敬」部分を「第一帰敬尊徳門」という。

## ●たにやた おん

tad=yathā om

<梵読>タッドウ・ヤター オーム

<智山>さて、オーン

<筆者>然れば、オーン。

※以上、大師の分科による「第二影表法身門」。

## ●びしゅだや びしゅだや さんまさんまさんまんだばばしゃそはらんだぎやちぎやかの(な)う

そははんば びしゅでい

viśodhaya viśodhaya sama-asama=samanta=avabhāsa=spharaṇa=gati-gahana=svabhāva=viśuddhe

<梵読>ヴィショーダヤ ヴィショーダヤ サマ・アサマ・サマンタ・アヴァバーサ・スハラナ・ガティ・ガハナ・スヴァバーヴァ・ヴィシュッデー

<智山>等無等に、地獄の底まで普照するを自性とする清浄尊よ。除き除きて清めたまえ。

<筆者>清め給え、清め給え。比べものない(くらいの)遍き光の輝きが(六)趣の深みに(まで)遍満する本性で清められたものよ。

※<智山>は、悉曇からのローマナイズ表記の「sama-asama」に何の注記もなく「等無等に」と訳す。しかし、「sama-asama」の仏典用例はない(『梵和大辞典』)。ここは「asama-sama」と読むべきではないか。とすると、「等無等に」は誤訳で、「等しいものがない」「無比なる」「無等等の」とすべきだ。冒頭、<智山>の悉曇の校訂や単語(熟語)の初歩的な読み取りに疑問が生ずる。

※<同>、「地獄の底」はうがった訳だがいただけない誤訳。「gati」は、仏典でも多彩な意味を持つが、ここでは「(六)趣」(六道)が妥当と思われる。

※<同>、「普照する」は、漢訳写しや他の資料からの転用を感じる。「普照する」でかたずけるのは簡便だが、「avabhāsa」と「spharāṇa」の意味の取り方がアバウトだ。翻訳作業の厳密さに疑問あり。

※<同>、「除き除きて」とは、どの語の訳なのだろうか？ いったい何を「除く」のだろうか？ ここでは「除く」べきものがわからない。

※以上、大師の分科による「第三淨除惡趣門」。

●あびしんじゃと まん そぎゃたばらばしゃの(な)うあみりたびせいけい まかまんだら・はだい  
あから あから あゆさんだらに

abhiṣīṅcatu mām sugata=vara=vacana=amṛta=abhiṣekai[r] mahā=mantra=  
padai[r] āhara āhara āyu[h]=saṃdhāraṇi

<梵読>アビシムチャトウ マーム スガタ・ヴァラ・ヴァチャナ・アムリタ・アビシェーカイ(ル)  
マハーマントウラ・パダイ(ル) アーハラ アーハラ アーユ(フ)・サムダーラニ

<智山>我れに灌頂したまえ。仏世尊善説の甘露の大真言句をもって涅槃に導き到らしめたま  
え。

<筆者>私を灌頂し給え。善逝(如来)の最も美しい言辞による甘露なる灌頂である、大いなる真  
言の句によって、(私に長寿を)もたらし給え、もたらし給え。寿命を(よく)維持するもの  
よ。

※<智山>の「仏世尊善説の甘露の大真言句」の中に、原文の「abhiṣeka」(灌頂)にあたる訳語  
がない。

※<同>、「āhara āhara」の強調繰り返しの部分に対応するのが「涅槃に導き到らしめたまえ」と思わ  
れるが、「ā-hṛ」は「もってくる」「もたらす」「与える」「取得する」「運び去る」「奪う」「取り去る」「除去す  
る」(『梵和大辞典』)といった意味で、原語から「涅槃に到る」などといった意味は出てこない。こう  
いう誤訳に出会うと、原文に忠実に和訳したとは思えなくなる。こんな飛訳を、何も知らずに信用し  
て読むであろう読者は気の毒だ。

「大師本」の『佛頂尊勝陀羅尼』(大正、374、B)には「摂受摂受摂受」または「三遍摧勝諸  
苦惱」とある。むべなるかな、であるが、私は敢えて「(私に長寿を)もたらし給え」とした。

※「āyu[h]saṃdhāraṇi」は「āhara āhara」に続く方がよく、次の行文の冒頭につけると文脈が調わな  
い。

※以上、大師の分科による「第四善明灌頂門」。

●しゅ(じゅ)だや しゅ(じゅ)だや ぎゃぎゃの(な)うびしゅでい うしゅにしゃびじゃやびしゅでい

さかさらあらしめいさんそぢてい さらばたたぎやたばろきやに さたはらみたはりほらに  
さらばたたぎやたきりだやちしゆたの(な)うちしゆちた まかぼだれい ばざらきややそうかたの  
(な)うびしゆでい さらばばらだばやどらぎやちはりびしゆでい

śodhaya śodhaya gagana=viśuddhe uṣṇīṣa=vijaya=viśuddhe  
sahasra-raśmi-saṃcodite sarva=tathāgata=avalokani ṣaṭ=pāramitā-paripūraṇi  
sarva=tathāgata-hṛdaya=adhiṣṭhāna=adhiṣṭhite mahā=mudre

vajra=kāya=saṃhatana=viśuddhe sarva=āvaraṇa=bhaya=durgati-pariviśuddhe

<梵読> ショーダヤ ショーダヤ ガガナ・ヴィシュッデー ウシュニーシャ・ヴィジャヤ・  
ヴィシュッデー サハスラ・ラシュミ・サムチョーディテー サルヴァ・タターガタ・  
アヴァローカニ シャットウ・パーラミター・パリプーラニサルヴァ・タターガタ・  
フリダヤ・アディシュターナ・アディシュティテー マハームドゥレーヴァジュラ・  
カーヤ・サムハタナ・ヴィシュッデー サルヴァ・アーヴァラナ・バヤ・ドウルガティ・  
パリビシュッデー

<智山> 無量寿尊よ。浄めたまえ、浄めたまえ。虚空自性尊よ。仏頂最勝清浄尊よ。衆生驚覚の  
千光明尊よ。観如来尊よ。六度成満尊よ。一切如来の核心位安住の大印契尊よ。金剛  
身清浄尊よ。離一切業障怖畏惡趣清浄尊よ。

<筆者> 清め給え、清め給え。虚空のように清められたものよ。仏頂の尊勝なることに清められた  
ものよ。千の光輝に発起されたものよ。すべての如来を観じるものよ。六波羅蜜を十分に  
満たしたものよ。一切如来の心咒(真言)の威神力によって加持されたものよ。大いなる  
(仏頂尊の)印よ。堅固なる身体(金剛身)の硬きことに清められたものよ。すべての(心  
を)覆い隠しているもの(障礙)と恐怖(怖畏)と惡趣から十分に清められたものよ。

※「gagana(=viśuddhe)」は、「虚空のように(如く)」が適切であろう。「大師本」も「如虚空(清浄)」。

※<智山>の、虚空自性尊の「自性」と衆生驚覚の「衆生」にあたる単語は原文にない。何の意  
味の補いか？

※「saṃcodite」を、私は自分で造語して「発起された」と訳した。密典的には「大師本」のように「驚  
覚」だろう。でも、「驚覚の(金剛)鈴」を連想してくれる人が多ければいいのだが。

※「sarva=tathāgata」には、『金剛頂経』によれば「一切如来」(単数、毘盧遮那如来(阿闍・宝生・  
無量寿・不空))と集会に雲集する無数の「一切の如来」(複数)とがある。漢訳や田久保先生は  
どちらも「一切如来」とするが、現在は「一切如来」と「一切の如来(たち)」に分けて表記する。ここ  
は、それに習うべき。

※<智山>は、「hṛdaya」を「核心」に訳しているが、『般若心経』の「般若波羅蜜多心」の「心」と同  
じケースで、「中心」とか「精要」の意味でいいだろうか？また、「adhiṣṭhāna」を「位」と訳しているが、  
そんなに多い用例だろうか。いったい「一切如来の中核位」とはどんな意味なのか？

私は、この「hṛdaya」を「心咒」(真言)とし、「adhiṣṭhāna」を「威神力」(不思議な靈力)とした。  
「adhiṣṭhita(ā)」(加持されたもの)と矛盾しないと思う。田久保先生は「心要」とするが、具体的な  
意味がわからない。

※私が「(心を)覆い隠しているもの(障礙)」と訳した「āvaraṇa」は、『心経』の「罽礙」のことで、「覆  
い隠しているもの」という意味の用例が多いところから、敢えて「(心を)覆い隠しているもの(障礙)」  
とした。「大師本」はこれを「一切障」とし、「業障」「報障」「煩惱障」をあげている。

※以上、大師の分科による「第五神力加持門」

●はらちにばりたや あよくしゅでい さんまやぢしゅちてい まに まに まかまに

pratinivartaya āyu[ḥ]=śuddhe samaya=adhiṣṭhite maṇi maṇi mahā=maṇi

<梵読> プラティニヴァルッタヤ アーユ(フ・)シュデー サマヤ・アディシュティター マニ マニ  
マハーマニ

<智山> 転迷開悟せしめたまえ。寿命清浄尊よ。一切如来三摩耶位安立尊よ。宝珠尊よ。宝珠尊よ。大宝珠尊よ。

<筆者> (障礙などから、私を)避けさせ給え。寿命の清められたものよ。(如来の)本誓に加持されたものよ。マニ(宝珠)よ、マニ(宝珠)よ、大いなるマニ(宝珠)よ。

※<智山>の「転迷開悟せしめたまえ」は飛訳?

※<同>、「一切如来三摩耶」の「一切如来」に相応する言語はない。「三摩耶」(samaya)を私は「三昧耶」とした。訳語の意趣で他意はない。「三昧耶」は「三昧耶戒」などでなじみの密教用語。「仏と衆生の本来平等(一体)」の意。仏が一切衆生を救う「本誓」の意。

※以上、大師の分科による「第六寿命増長門」。

●たたたぼだくちはりしゅでい びそほたぼうぢしゅでい じゃや じゃや びじゃや びじゃや

さんまら さんまら

tathātā=bhūta=koṭi=pariśuddhe visphoṭa=buddhi=śuddhe jaya jaya vijaya vijaya

smara smara

<梵読> タターター・ブータ・コーティ・パリシュッデー ヴィスポータ・ブッディ・シュッデー  
ジャヤ ジャヤ ヴィジャヤ ヴィジャヤ スマラ スマラ

<智山> 真如實際遍満清浄尊よ。仏智開敷清浄尊よ。撃て撃て悪魔、摧け摧け怨敵、憶持憶念したまえ衆生。

<筆者> 真理(真如)が如実に存在する湾曲部(仏陀の頭頂)で十分に清められたものよ。(仏頂に)顕現した仏智に清められたものよ。勝ち給え、勝ち給え。打ち勝ち給え、打ち勝ち給え。記憶し給え、記憶し給え。

※「bhūta=koṭi」を「大師本」は「實際(遍満)」とするが、意味がよくわからない。私は、直訳して「(真理(真如)が)如実に存在する(bhūta)湾曲部(koṭi)」とした。つまり「仏陀の頭頂(部分)」の意味。

「koṭi」は、「弓の弧(湾曲)の先端」「極端」「高さ」といった意味が原意。漢訳では「際」「實際」「辺際」「頂」、「百千」「千萬」「萬億」「俱胝」といったアカウンタブルな数の意味がある(『梵和大辞典』)。

<智山>の訳語である「實際遍満」は「大師本」の丸写し(パクリ)?こんな訳語は普通は思いつかない。大正蔵経所収の参考資料の訳語に頼り、原語の原意の吟味もせず、自分なりの訳語を考案しようとしてもしない安直で悪しき例だ。

※<智山>の、「撃て撃て悪魔」とは何か、「摧け摧け怨敵」とは何か?「撃て撃て」も「摧け摧け」も「jaya」や「vijaya」の訳語としてどうか?「憶持憶念したまえ衆生」の「衆生」に相当する原語はない。何のための補いかよくわからない。

※以上、大師の分科による「第七定恵相應門」。

●さらばぼだぢしゅちたしゅでい ばじり ばざらぎやらべい ばざらん ばんぼと まま しゃりらん

sarva=buddha=adhiṣṭhita=suddhe vajri vajra=garbhe vajraṃ bhavatu mama śarīraṃ

<梵読>サルヴァ・ブツダ・アディシュティタ・シュッデー ヴァジュリ ヴァジュラ・ガルベ

ヴァジュラム バヴァトウ ママ シャリーラム

<智山>一切仏智安住尊よ。金剛尊よ。金剛蔵尊よ。我れ(某甲)と一切衆生の身体を金剛身となしたまえ。

<筆者>すべての仏陀の加持によって清められたものよ。金剛(堅固なるもの)よ。金剛(堅固なるもの)を蔵するものよ。私の身体を金剛(堅固なるもの)にし給え。

※<智山>の、「buddha」を「仏智」とするのは同じことのように同じではない。「buddha」は「仏陀」「覚者」「仏」と訳するのが穏当で、「buddhi」を「仏智」とするのが用例だ。「buddha」を「仏智」とする理由がわからない。

※以上、大師の分科による「第八金剛供養門」。

●さらばさとばんん しゃ きややはりびしゅでい さらばぎやちはりしゅでい さらばたたぎやた

しっしゃ めい さんまじんばさえんとう さらばたたぎやた さんまじんばさぢしゅちてい

ぼうぢやや ぼうぢやや びぼうぢやや びぼうぢやや ぼうだや ぼうだや びぼうだや

びぼうだや さんまんだはりしゅでい さらばたたぎやたきりだやぢしゅたの(な)うぢしゅちた

まかぼだれい

sarva=sattvānāṃ ca kāya=parivīśuddhe sarva=gati=parīśuddhe sarva=tathāgatāś=ca

me samāśvasayantu sarva=tathāgata=samāśvāsa=adhiṣṭhite

budhya budhya vibudhya vibudhya bodhaya bodhaya vibodhaya vibodhaya

samanta=parīśuddhe sarva=tathāgata=hr̥daya=adhiṣṭhāna=adhiṣṭhita=mahāmudre

<梵読>サルヴァ・サットウヴァーナームチャ カーヤ・パリヴィシュッデー サルヴァ・ガティ・

パリヴィシュッデー サルヴァ・タターガターシュチャ メー サマーシュヴァサヤントウ

サルヴァ・タターガタ・サマーシュヴァーサ・アディシュティター

ブドウヤ ブドウヤ ヴィブドウヤ ヴィブドウヤ ボーダヤ ボーダヤ ヴィボーダヤ ヴィボ

ーダヤ サマンタ・パリシュッデー サルヴァ・タターガタ・フリダヤ・アディシュターナ・

アディシュティタ・マハームドゥレー

<智山>一切趣清浄尊よ。わが身を常時に身清浄たらしめたまえ。一切如来は我れを安慰せしめたまえ。一切如来安慰尊よ。みそなわしめたまえ。承引したまえ。悟らしめたまえ。悟らしめたまえ。それぞれに。普遍光明清浄尊よ。一切如来の核心位安住の大印契尊よ。

<筆者>また、すべての衆生の(身体)も(金剛(堅固なるもの)にし給え)。身体が十分に清められたものよ。すべての(悪)趣から清められたものよ。また、すべての如来は私を激励し給え。すべての如来の激励に加持されたものよ。目覚め給え、目覚め給え。よくよく目覚め給え、よくよく目覚め給え。覚らせ給え、覚らせ給え。よくよく覚らせ給え、よくよく覚らせ給え。遍く十分に清められたものよ。一切如来の心咒の威神力に加持された大いなる(仏頂尊の)印よ。

※<智山>前科の和訳、「と一切衆生」に対応する部分は原文ではこの分科にまたがっている。

※<同>、「parivīśuddhe」の接頭語「pari」をここで「常時に」と訳す意味がわからない。

※<智山>の、「samāśvāsa」の訳語の「安慰」は、原意としてはポピュラーではない。「蘇生」「救助」

「激励」の方が有力である。「samā=śvas」は「息を吹き返す(蘇生する)」「気を落ち着ける」「勇気を起こす」「～を信頼する」(『梵和大辞典』)の意で、使役形の場合に「回復せしめる」のほか「鼓舞する」「慰安する」となる。

「安慰」などという日本語は普通一般には考えつかない。「大師本」とあるいはそれを見た田久保周譽先生の訳語をそのままいただいたのではないか。

※以上、大師の分科による「第九普証清浄門」。

## ●そわか

svāhā

＜梵読＞スヴァーハー

＜智山＞成就あれかし。

＜筆者＞成就あれ。

※以上、大師の分科による「第十成就涅槃門」。

すでにお分りの通り、＜智山＞の和訳は、例えば「āyu[h]=saṃdhāraṇi」→「無量寿尊」、  
「gagana=viśuddhe」→「虚空自性尊」、「sarva=tathāgata=avalokani」→「観如来尊」、  
「sarva=āvaraṇa=bhaya=durgati-pariviśuddhe」→「離一切業障怖畏惡趣清浄尊」のように、「呼格(～よ)」の複合語に「尊」の訳語を補っている。これは「大師本」にもない趣向で、田久保周譽先生の訳語に倣ったものか？普通、オリジナルには思い浮かばない訳語だと思うのだが。

これは訳者なりの意図によるものだと思うが、これを一般の住職・教師が見るとそれぞれ独立した尊格の名称だと思うにちがいない。とくに無量寿尊や虚空自性尊は、阿弥陀如来や虚空蔵菩薩を想像させ、あるいは誤解の対象ともなるだろう。この翻訳意図に、私はあまり賛成できない。

仏尊の特性の比喩的「言い換え」は、サンスクリット文によくある修辞であり、真言・陀羅尼にはよく登場する。それをひとつひとつ「尊」にすることで、かえって原意をそこなう危険があり、さらに言えばインド的修辞のよさを殺すことになるからだ。これは、サンスクリットの和訳、とくに真言・陀羅尼の和訳では重要な問題である。

たどたどしいけれど、原文に忠実にそのまま「～に(よって)清められたものよ」と和訳したところで、教学上のまちがいを犯すわけでもないのだから、サンスクリットに不案内な人が目を通すであろう「教化資料」で、このような誤解を招きそうな意識に及ぶ必要はないのではないか。

その上、はじめの「尊」にあたる

「[a]sama=sama=samanta=avabhāsa=spharaṇa=gati=gahana=svabhāva=viśuddhe」を、「等無等に地獄の底まで普照するを自性とする清浄尊よ」とくだいて訳しながら、次の「āyu[h]=saṃdhāraṇi」からはくだいて訳さずに「無量寿尊」とし、「gagana=viśuddhe」を「虚空自性尊」とし、「sarva=tathāgata=avalokani」を「観如来尊」とし、「sarva=āvaraṇa=bhaya=durgati-pariviśuddhe」に至っては「離一切業障怖畏惡趣清浄尊」と、まるで漢訳と変わらない「和訳」をしている。それならば、「等無等に地獄の底まで普照するを自性とする清浄尊よ」を「等無等地獄底普照自性清浄尊よ」とでもしたらどうか。別に揚げ足を取るつもりはない。くだいた和訳の方が、「教化資料」に目を通す読者に誤解を受けないで済むのではないかと言いたいのである。

さて、今も指摘したように、各「尊」の訳語は、これを「和訳」というのだろうか。見ただけでは意味がわからない漢訳語や仏教術語をくっつけ合わせたもので、読者には意味不明の日本語がそこに並んでいる。

それに、この和訳では真言・陀羅尼の特徴である複合語を訳者がどう吟味しどう読み取ったのか、部外者にはまったくわからない。[解説]にも、例えば文法上(\* tatpuruṣa や karmadhāraya や bahuvrīhi など)の読み取り過程が何も記されていない。これでは、複合語の一樣でない解釈の自由をかえって阻害してしまい、他の学者や後学の者に不親切・不誠実である。

この陀羅尼の和訳全体を通して、この訳業をされたい大学匠は、丹念に単語の意味や文法・修辭を考える初歩的な手続きを飛ばしておられるのではないかと思えてならない。失礼ながら、これは一流の学者の翻訳とはいいい難い。本当にこれが智山の誇る大学匠ご自身によってなされたのだろうか。かなり疑わしい。

\* tatpuruṣa や karmadhāraya や bahuvrīhi など

### (1) 限量合成語 tatpuruṣa (依主釈)

○依主とは(複合語を構成する、例えば二つの語の)後分が前分によって制限される合成語をいう。

なお、狭い意義の依主は前分が後分に対して格の関係を有することをいう(固有の依主)。

例えば、grāma-gata(村へ行った)の前分は作業格(accusative)、deva-datta(天により授けられた)の前分は作具格(instrumental)、svarga-patita(天から墮ちた)の前分は所従格(ablative)、rāja-putra(王の子)の前分は所属格(genitive)である。

○依主の前分には格の形を有することがある。

vācam-yama(声を制して=黙して)、divas-pati(天の主)、padme-śaya(蓮の上に憩う)。

○何れの(動詞の)語根も合成語の最後分として用いられ、現在分詞・為他言の意義となることがある。

veda-vid(ヴェーダに通じた)、anna-bhuj(食する)。

短韻の語根には t を加える。

ji(勝つ)の viśva-jit(一切に勝てる)、kr(造る)の loka-kṛt(造世界者)。

もし男性語或いは中性語を形容する合成語の終りの語根が ā で終る時は、その ā を短縮する。

sthā(住まる)が abhyāśa-stha(近くに住まれる)。

### (2) 限量合成語 karmadhāraya (持業釈)

○依主の前分が形容詞・副詞或いはその類で後分を制限する場合を持業釈という。

grāmya-gaja(馴れている象)、parama-ānanda(最勝の喜び)、ati-dīrgha(極めて長い)、su-dārūna(甚だ激しい)、a-kṛta(為されざる)、antar-deśa(内部、中の方)、apa-rūpa(不正な形)。

○この合成語の前分がしばしば名詞となることがある。とくに比較を表す時はそうである。

kusuma-sukumāra(花+優美な=花の如く優美な)、vajra-karkaśa(金剛+堅い=金剛の如く堅き)、kailāsa-gaura(カイルーサ+白い=カイルーサの如く白き)。

また、後分もまた名詞の時がある。この時は前分が能比で後分が所比となる。

puruṣa-siṃha(人+ライオン=ライオンの如き人)、rājar-śabha(牡牛+王=牡牛の如き王)、nṛ-paśu(獣+人=獣の如き人)、kanyā-ratna(処女+宝=宝の如き処女)、

anaṅga-bhujaṅga(アナンガ(恋愛の神)+蛇=蛇の如きアナンガ(恋愛の神))、  
kāla-hariṇa(時間+羚羊=羚羊の如き(疾駆する)時間)。

○依主の前分が数詞でその語形が中性名詞またはīで終る女性名詞の場合は、これを帶数積の語(dvigu)という。

tri-rātra(三夜)、tri-loka·tri-lokī(三世)、pañca-gava·pañca-gavī(五牛)。

### (3)所有合成語 bahuvrīhi(多財積)

○多財とは最後分が名詞または名詞の意味に使われる形容詞で全体が一つの形容詞として用いられる限量合成語をいう。この合成語は「持する」或いは「有する」という意味を表す。

dīrgha-bāhu(長い臂をもつ)、prasanna-mukha(悦ばしい顔容をした)、mauna-vrata(沈黙の戒を受けた)、

manda-mati(愚劣な知恵もつ)、vi-phala(実りのない)、an-anta(終りのない)、dur-manas(悪しき心もつ、憂える)、sa-pakṣa(翼をもつ、翼のある)、cintā-para(思惟を最上の目的とする=思惟に専一なる)。

○多財は形容詞と同じ作用があるから、ともに用いられた名詞の性に従ってその性を定める。āで終る女性の多財合成語が男性または中性の名詞に関係する時は、その韻をaとする。

vidyāは alpa-vidya(少し知っている)のように、以下 jihvāは dvi-jihva(二舌のある)、māyāは bahu-māya(多くの幻術をもつ)、bhāryāは sa-bhārya(妻とともにある)。

また、この合成語の全部に後接字 kaを加えることがある。

bahu-bharṭṛka(多くの夫をもつ)、viśāla-uraska(広い胸をもつ)、nir-arthaka(意味をもたない、利益をもたない、目的をもたない)、sa-agnika(アグニ(火神)とともにある)、

○「手」という意味の語は合成語の末尾にあって「手に持っている」という意味をもつ。

pātra-hasta(器を手に持つ)、daṇḍa-pāṇi(杖を手に持つ)。

(『實習梵語学』(荻原雲来)より)

## 一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼

この陀羅尼は、『一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經』(不空訳)にもとづく。經説によれば、「壊れた塔を世尊が供養した」ところ、その塔は「大全身舎利の積集した如来の宝塔」だった。この塔のなかには「一切如来無量俱胝の心陀羅尼印の法要」がある、という。塔は仏身そのものであり、そのなかにある陀羅尼も仏身、舎利塔=陀羅尼=仏身だという一体的信仰が読み取れる。

事実、この、如来の(全身)舎利を安置する(宝篋印)塔を拝みながらこの陀羅尼を読誦すると、諸々の罪障が消滅し、災難から免れ成仏できるという信仰は、インドの民衆の間に民間信仰として広まったらしい。中国・日本では古くから宝篋印塔を建立することが行なわれ、時には墓標ともなった。宝篋とは「宝経蔵」の意。

なお関係資料は少なく、漢訳にあと、不空訳の『別本』と施護訳の『一切如来正法秘密篋印心陀羅尼經』があるのみである。

### ●のうまく しっちりやぢびきやなん さらばたたぎやたなん

Namas tri-adhvikānāṃ sarva-tathāgatānāṃ

(＜智山＞の悉曇からの校訂ローマナイズ)

＜梵文の読み＞ナマス トゥリ・アドゥヴィカーナーム サルヴァ・タターガターナーム

＜智山の和訳＞三世一切の如来に帰命したてまつる。

＜筆者の直訳＞三世のすべての如来たちに頂礼したてまつる。

●おん ぼび はんばだばり ばしゃり ばしゃたい そろ そろ だら だら さらばたたぎやた  
だどだり

om̐ bhuvi bhavana=vari vacari vacaṭai suru suru dhara dhara sarva=tathāgatā=  
dhātu=dhari

＜梵読＞オーム ブヴィ バヴァナ・ヴァリ ヴァチャリ ヴァチャタイ スル スル ダラ ダラ  
サルヴァ・タターガタ・ダートウ・ダリ

＜智山＞オーン。大地の最勝宝篋よ。能説の宝篋よ。説法して苦を除きに除きたまえ。

一切の如来の六大任持の宝篋よ。任持に任持したまえ。

＜筆者＞オーン。地上で最上の宝殿をもつものよ、雄弁なものよ、雄弁なものたちによって、流れ  
出給え。流れ出給え。護持し給え、護持し給え。一切の如来の舍利を護持するものよ。

※＜智山＞の、「宝篋」にあたる原語は原文はない。「bhavana」に「宝篋」の意味はない。私は  
「住所(処)」「邸宅」「宮殿」「神殿」「星位」「生まれ来ること」「生長する場所」、「天宮」「最勝  
殿」(『梵和大辞典』)といった意味を勘案して、「宝殿」とした。この宝篋印陀羅尼でも、仏頂  
尊勝陀羅尼の「尊」と同様、「宝篋」の語を補っているが、「和訳」としていかどうか疑問であ  
る。

※「vacari」という語はサンスクリットに存在しない。悉曇自体の誤書写ではないか？ここは「vācāli」  
(女、形、「多弁な」「饒舌な」)のvocativeに読む。私は「雄弁なもの」(=「陀羅尼」)と訳した。

＜智山＞は、ここを何も注記せず、しかも「能説の」という訳語をあてている。サンスクリットに存在し  
ない「vacari」という語から、よく「能説の」という訳語が頭に浮ぶものだ。これは、ハッキリ言って  
「vacari」を調べもせずに漢訳か田久保先生の訳語(「能弁説」)を見てパクったとしか思えない。だ  
から、「vacari」が存在しないことや、悉曇の誤写かもしれないことに気がつかないのだろう。

※「vacaṭai」もこのままでは不明な語である。＜智山＞には何も注記がない。ところが、悉曇では  
「vacaṭai」なのにローマナイズは「vācāṭai」となっている。ここはちゃんと校訂したのだろうか、まちがえ  
たローマナイズ表記が偶然に当たったのだろうか。ここは「vācāṭā」(女、形、「饒舌な」「話ずきの」)の  
複数・instrumental「vācāṭaiḥ」に直して読む。＜智山＞の「説法して」という訳語は原意をかなり  
飛躍している。何か参考資料を見てまたパクったのであろう。私は、「vācāṭai」を「雄弁なもの(陀羅  
尼を誦唱する者)たちによって」とした。

※「suru」は「sr」(「早く走る」「流れる」「滑りおちる」「(風が)吹く」「逃げる」「横切る」「渡る」(『梵和大  
辞典』))の単数、二人称の命令形。この原意に＜智山＞の「苦を除きに除きたまえ」という意味は  
ない。しかも、ここでなぜ「苦を除く」ことが必要なのかよくわからない。

私は「sr」の原意を尊重し、「早く走る」「流れる」、つまり「雄弁なもの(陀羅尼を誦唱する者)た  
ち」によって陀羅尼が唱えられ、次々とその口から「流れ出る」ことをイメージした。

※＜同＞、「苦を除きに」の「苦」にあたる原語はない。

※＜同＞、「六大」は「dhātu」の訳語だが、インドの原語としては「元素」の意味から「五大」の方がい  
い(「六大」は後世の宗祖大師の発明だから)だが、ただ、ここでは「五大」よりも「骨」つまり「仏舎

利」→「如来の舍利」が適切だろう。

- はんどま ばんばち じゃやばり ぼだり さんまら たたぎやたたらましゃきゃらはちばりたの  
(な)う ばじりぼうちまんだりようきやりりようきりてい さらばたたぎやたちしゅちてい

padmaṃ bhavati jaya=vari mudri smara tathāgata=dharma=cakra=pravarttana=vajri  
bodhi=maṇḍa=alaṃkāra=alaṃkṛte sarva=tathāgata=adhiṣṭhite

<梵読>パドゥマム バヴァティ ジャヤ・ヴァリ ムドゥリ スマラ タターガタ・ダルマ・チャクラ・プラ  
ヴァルツタナ・ヴァジュリ ボーディ・マンダラ・アラムカーラ・アラムクリテー サルヴァ・タタ  
ーガタ・アディシュティテー

<智山>生蓮華の宝筐よ。魔怨摧伏の最勝宝筐よ。印母の宝筐よ。憶持したまえ。一切如来の金  
剛不壊の転法輪宝筐よ。菩提道場莊嚴の宝筐よ。如来安住の宝筐よ。

<筆者>蓮華より出生したものよ、最勝の勝利あるよ、印よ。記憶し給え。如来の転法輪(説法)の  
(ような)堅固なるものよ、サトリ(菩提)の道場の莊嚴によって莊嚴されたものよ、すべて  
の如来に加持されたものよ。

※<智山>のローマナイズは「padmaṃ bhavati」とあるが、悉曇には「padma=bhavati」とある。<智  
山>は「padmaṃ bhavati」を「生蓮華」と訳したが文法に叶っていない。「蓮華を生む(もの)」の意  
味か？

私は、「padma=bhavati」のまま「蓮華より出生したもの」とした。

※<同>、「魔怨摧伏の」に相応の原語はない。「印母」の「母」にあたる原語もない。

- ぼうだや ぼうだや ぼうち ぼうち ぼぢゃ ぼぢゃ さんぼうだに さんぼうだや

bodhaya bodhaya bodhi bodhi budhya budhya saṃbodhani saṃbodhaya

<梵読>ボーダヤ ボーダヤ ボーディ ボーディ ブドゥヤ ブドゥヤ サムボーダニ  
サムボーダヤ

<智山>菩提を各自に覚らしめたまえ。みそなわしたまえ。承引したまえ。正等覚を覚らしたまえ。

<筆者>覚らしめ給え、覚らしめ給え。サトリ(菩提)よ、サトリ(菩提)よ。覚り給え、覚り給え。等覚  
(開悟)したものよ、等覚(開悟)せしめ給え。

※<智山>の「みそなわしたまえ」は「bodhi bodhi」のことか？「承引したまえ」は「budhya budhya」の  
ことか？

※<同>、「正等覚を覚らしたまえ」は「saṃbodhani saṃbodhaya」のことと思われるが、  
「saṃbodhani」を「正等覚を」でいいのだろうか？

- しゃら しゃら しゃらんど さらばばらだに

cala cala calaṃtu sarva=āvaraṇāni

<梵読>チャラ チャラ チャラントウ サルヴァ・アヴァラナーニ

<智山>消滅に消滅したまえ。衆生また消滅せよ、一切の障礙を。

<筆者>揺さぶり給え、揺さぶり給え。一切の障害(罣礙)を揺さぶり給え。

※<智山>、「cal」という動詞は「動く」「揺れる」「前進する」「進行する」「去る」「出発する」「彷徨す  
る」、「動」「移動」「動揺」「震動」「動転」(『梵和大辞典』)といった意味であって「消滅する」という  
意味は微弱だ。ちなみに「acala」は「不動明王」の「不動」、「動かない」であって「消滅しない」では

ない。なお「calaṃtu」は単数・三人称の命令法で使役法ではない。

※ <同>、「衆生」にあたる原語はない。なぜ、ここに「衆生」の補いが必要なのかわからない。

- さらばはんばびぎやてい ころ ころ さらばしゆきやびぎやてい さらばたたぎやたきりだや  
ばざらに さんばら さんばら さらばたたぎやたぐぎやたらんぢ ぼぢり ぼでい そぼてい  
さらばたたぎやたぢしゆちただどぎやらべい そわか

sarva-pāpa=vigate huru huru sarva-śoka=vigate sarva-tathāgata-hṛdaya=vajrāṇi  
saṃbhara saṃbhara sarva-tathāgata-guhya-dhāraṇi mudri buddhe subuddhe  
sarva-tathāgata-adhiṣṭhita-dhātu-garbhe svāhā

<梵読>サルヴァ・パーバ・ヴィガテー フル フル サルヴァ・ショーカ・ヴィガテー サルヴァ・  
タターガタ・フリダヤ・ヴァジュリ サムバラ サムバラ サルヴァ・グフヤ・ダーラニ  
ムドウリ ブッデー スブッデー サルヴァ・タターガタ・アディシュティタ・ダートウ・  
ガルバー スヴァーハー

<智山>一切の悪なき宝筐よ。抜済したまえ、抜済したまえ。一切の憂苦なき一切の悪なき宝筐よ。  
一切如来心金剛の宝筐よ。与えたまえ、与えたまえ。一切如来心秘密陀羅尼の宝筐よ。  
印契・仏智・妙智の宝筐よ。一切如来安立の六大の胎蔵である宝筐よ。成就あれかし。

<筆者>一切の悪業を離れた(遠離した)ものよ。取り除き給え、取り除き給え。一切の苦悩を離れた  
(遠離した)ものよ。一切如来の心咒の(ような)堅固なるものを、集め給え、集め給え。  
一切如来の秘密の陀羅尼よ。印よ。覚ったものよ、充分に覚ったものよ。一切如来に加持  
された舍利を蔵するものよ。成就あれ。

※「huru」は「hr̥」(「～の上に保つ」「もたらす」「提供する」「持ち去る」「連れ去る」「奪う」「取り去  
る」「切断する」「消散させる」(『梵和大辞典』))の単数・二人称・命令形。

※ <智山>の、「心」にあたる原語はない。「guhya」は「秘密」で充分で、ここで「心秘密」とする  
必要があるだろうか？

※ <同>、「仏智」「妙智」は「buddhe subuddhe」にあたると思われる。「buddha」(覚った者・覚  
者・仏・仏陀)を「仏智」、「subuddha」(同)を「妙智」と和訳するだろうか？

※ <同>、「六大の胎蔵である宝筐」とは何のことか？ならば、「舍利を蔵する宝筐(印塔)」の方が  
通じるではないか。

- さんまやぢしゆちてい そわか

samaya-adhiṣṭhite svāhā

<梵読>サマヤ・アディシュティテー スヴァーハー

<智山>誓願安立の宝筐よ。成就あれかし。

<筆者>(如来の)本誓に加持されたものよ。成就あれ。

- さらばたたぎやたきりだやだどぼだり そわか

sarva-tathāgata-hṛdaya-dhātu-mudri svāhā

<梵読>サルヴァ・タターガタ・フリダヤ・ダートウ・ムドウリ スヴァーハー

<智山>一切如来心要の六大印契の宝筐よ。成就あれかし。

<筆者>一切如来の心咒である舍利を印とするものよ。成就あれ。

※<智山>では、仏頂尊勝陀羅尼でも「hr̥daya」を「核心位」と和訳し、この宝篋印陀羅尼では「心」とか「心要」と訳して一貫しない。

●そはらぢしゅちたそとべい たたぎやたぢしゅちてい ころ ころ うん ぬん そわか

supraṭiṣṭhita=stūpe tathāgata=adhiṣṭhite huru huru hūṃ hūṃ svāhā

<梵読>スプラティシュティタ・ストウパー タターガタ・アディシュティテー フル フル

フーム フーム スヴァーハー

<智山>一一の如来妙住の塔よ。如来安住の宝篋よ。抜済したまえ、抜済したまえ。円満したまえ、円満したまえ。成就あれかし。

<筆者>よく建立された塔よ、如来に加持されたものよ。取り除き給え、取り除き給え。フーム、フーム。成就あれ。

※<智山>は、「supraṭiṣṭhita」(「打ち立てられた」「確立した」「建てられた」(『梵和大辞典』))を「一一の如来妙住の」と訳す。原語の原意を離れた飛訳か、意味の取りちがえとしか言いようがない。

●おん さらばたたぎやうしゆにしゃだどぼだらに さらばたたぎやたん さだどびぼうしたぢしゅちてい うん ぬん そわか

oṃ sarva=tathāgata=uṣṇīṣa=dhātu=mudrāṇi sarva=tathāgataṃ sadhātu=vibhūṣita=adhiṣṭhite hūṃ hūṃ svāhā

<梵読>オーム サルヴァ・タターガタ・ウシュニーシャ・ダートウ・ムドウラーニ サルヴァ・タターガタム サダートウ・ヴィブータ・アディシュティテー フーム フーム スヴァーハー

<智山>オーン。一切如来仏頂の六大印契の宝篋よ。一切如来六大莊嚴安住の宝篋よ。円満したまえ、円満したまえ。成就あれかし。

<筆者>オーン。一切如来の仏頂の舍利を印とするものよ、一切如来の舍利に莊嚴されて加持されたものよ。フーン、フーン。成就あれ。

※「mudrāṇi」を、ここは「mudre」と読む。

※「sarva=tathāgataṃ sadhātu=vibhūṣita=adhiṣṭhite」は「sarva=tathāgata=dhātu=vibhūṣita=adhiṣṭhite」に読む。

再々注記で指摘してきたように、<智山>の訳語は訳者の意趣によってかなりの意識(時には飛訳)が行われ、和訳語そのものを見ただけでは、おそらく専門家でも半分はわからない難解な日本語になっている。しかも、その訳語はほとんど訳者自身がサンスクリットの文法や修辭の特性を考慮しながらオリジナルに創案した語とは考えられず、漢訳語の安易な丸写しや先学の訳語をパクリであると思われる仕方がない訳業である。

## 阿弥陀如来根本陀羅尼

この陀羅尼は、三陀羅尼のなかでも最も私たちに身近なもので、檀徒寺の住職・教師は大方が空んじている。別名「無量寿如来呪」あるいは「無量寿如来大呪」ともいわれ、「小呪」は(おん あみりたていせい から うん、Oṃ amṛta=teje hara hūṃ)。

この陀羅尼に類似する往生仏国・往生浄土を説く陀羅尼が、密教以前の浄土思想系經典に見られることから、この陀羅尼も密教以前の往生信仰の影響下で成立したものと考えられ、もともと密教正典のなかに由来のあるものではないと考えられている。

現行の陀羅尼と一致する梵文をもつ儀軌は見あたらず、不空訳の『無量寿如来観行供養儀軌』のものが近いとされる。和訳に用いられるローマナイズされたサンスクリット文は、このほかの異本を参考にし、先学が校訂されたものを依用することが通例となっている。

阿弥陀如来は浄土教の一尊仏で、日本では極楽往生信仰のシンボルとして中世に武士・民衆の信仰を一身に集めたが、密教では単独の尊格ではなく(金剛界)五仏(五智如来)のなかの一尊(別称、観自在王如来)で、曼荼羅では中心の大日如来の西方に位置する。

別名、無量寿如来(amitāyus)・無量光如来(amitābhā)・甘露王如来。「無量の寿命」「永遠のいのち」「不死」という人間の永遠の願望に応え、この仏を念ずる衆生を救ってやまないことを本願とする如来である。陀羅尼のなかで何度も繰り返される「甘露」(amṛta)は、「不死」(amṛta)と原語を同じくする阿弥陀如来の属性である。

余談ながら、「無量寿」「無量光」の「無量」にあたるサンスクリット「amita」(俗語)を「amṛta」と同一の語義と考える説(田久保周誉『真言陀羅尼蔵の研究』)があるが、「調べてみると、パーリ語でも、アルダマガディー語でも、「amṛta」は「amata」で「amita」ではなく、語根も「mṛ」ではなく「mā」であることから、似てはいるが同一の語義の語とは言えない」(法友・松本照敬師)のである。

尊勝陀羅尼・宝篋印陀羅尼と同じく、この陀羅尼を唱えると過去・現在の罪業が消滅し、未来世において往生極楽ができるという。

ただ、住職(出家)の葬儀・法事には尊勝陀羅尼を唱えて、在家の檀徒・信者の葬儀・法事にはこの阿弥陀如来根本陀羅尼を読む、という一部で行われている区別慣例に何の根拠があり何の意味があるのか、私にはよくわからない。

### ●のうぼう あらたんの(な)うたらやあや

Namo ratna=trayāya

<梵文の読み>ナモー ラトウナ・トウラーヤー

<智山の和訳>三宝に帰依したてまつる。

<筆者の直訳>(総じては)宝の三つ組なるもの(三宝=仏・法・僧)に頂礼したてまつる。

※最初の帰敬部。私たちの表白の「総じては～の三宝に白して日さく」も同じ趣旨。

### ●の(な)うまく ありやあみたあばあや たたぎやたやあらかてい さんみやくさんぼだや

namaḥ ārya=amitābhāya tathāgatāya=arhate samyaksaṃbudhāya

<梵読>ナマハ アールヤ・アマターバーヤ タターガターヤ・アルハテー

サムヤツクサムブツダーヤ

<智山>聖なる無量光如来、阿羅漢、正等覚者に帰依したてまつる。

<筆者>(殊には)聖なる無量の光もつ(無量光)如来、阿羅漢、正等覚者に、頂礼したてまつる。

※第二の帰敬部。私は、私たちの表白になぞって、敢えて「(殊には)」を補ってみた。

### ●たにやた

tad=yathā

<梵読>タッドウ・ヤター

<智山>(訳がない)

<筆者>然れば、

- おん あみりてい あみりとうどはんべい あみりたさんばんべい あみりたぎやらべい  
あみりたしっでい あみりたていせい あみりたびきらんでい あみりたびきらんだぎやみねい  
あみりたぎやぎやの(な)うきちきやれい あみりたどんどびそばれい さらばあらたさだねい  
さらばきやらまきれいしやきしやよ(や)うきやれい そわか

oṃ amṛte amṛta=udbhava amṛta=saṃbhava amṛta=garbhe amṛta=siddhe

amṛta=teje amṛta=vikrānte amṛta=vikrānta-gāmine

amṛta=gagana-kīrti-kare amṛta=duṇḍubhi=svare

sarva-artha-sādhane sarva-karma=kleśa-kṣayaṃ-kare svāhā

<梵読>オーム アムリテー アムリトッドウバペー アムリタ・サムバペー アムリタ・ガルペー アム  
リタ・シッデー アムリタ・テージェー アムリタ・ビクラーンター アムリタ・ビクラーンタ・  
ガーミネー アムリタ・ガガナ・キールティ・カレー アムリタ・ドゥンドゥビ・スヴァレー  
サルヴァ・アルタ・サーダネー サルヴァ・カルマ・クレーシャ・クシャヤム・カレー  
スヴァーハー

<智山>甘露尊に、甘露所生の尊に、甘露能生の尊に、甘露の胎なる尊に、甘露成就尊に、  
甘露威光尊に、甘露遊行尊に、甘露広舌尊に、甘露の鼓音尊に、一切事成就尊に、  
一切業障除滅尊に帰依したてまつる。成就あれかし。

<筆者>オーン。不死なるものよ、不死より出生したものよ、不死よりともに出生したものよ(不死と  
ともにあるものよ)、不死を蔵するものよ、不死を成就したものよ、不死の輝きがあるもの  
よ、不死の勇猛をもつものよ、不死の勇猛をもって進むものよ、不死の、虚空のような、  
称賛をなすものよ、不死の、太鼓の音響のような、とどろきをもつものよ、すべての目的を  
達成させるものよ、すべての業と煩惱の滅除をなすものよ、成就あれ。

※この部分がこの陀羅尼の主文。「amṛta」(「不死」「甘露」という阿弥陀如来の特性を十例挙げて讃嘆する(「十甘露呪」)。

ちなみに、この部分の「～よ」(vocative)の複合語はみな女性形である。複合語の読み取りによく注意が必要である。

この点、<智山>の「甘露威光尊」「甘露遊行尊」といった和訳では、複合語に潜むサンスクリット特有の修辭法がまったく意味をなしていない。karmadhāraya に読んでいるのか bahubhīhi に採っているのか、その気配も感じない。しかも、日本語としては意味不明だ。

※<智山>の、「甘露遊行尊に」はこの語で「amṛta=vikrānte」と「amṛta=vikrānta-gāmine」の二語の和訳を兼ねているのだろうか。訳語が一つ足りない。また、「遊行」という訳語は適切だろうか。「甘露遊行」とはどういう意味なのか。

※「teje」は、「tejas」の女・vocativeとすれば「tejah」とならなければならないが・・・？

※「gāmine」は、「gāmin」のvocativeではないが・・・？

※「kara」の女性形は「karī」で、vocativeは「kari」なのだが・・・？「kare」は「karā」のvocative？

こういう修辭上のことは、インド留学でもしてサンスクリット修辭に通じていなければ解明できない。

「十甘露呪」に繰り返し出てくる「amṛta」を私は「不死」と訳した。原語(「mr̥」(死ぬ)の過去受動分詞「mṛta」の否定形「a-mṛta」(死せざる、不死の))に近い意味だからである。いずれにせよ、「不死」「甘露」は「阿弥陀如来」と同義であり、「無限の生命」「無量長寿」といったこの如来の特性を言い表している。

### 3 『般若心経』末尾の真言

●ぎゃーてー ぎゃーてー はーらーぎゃーてー はらそーぎゃーてー ぼーじー そわか  
gate gate pāra=gate pāra=saṃgate bodhi svāhā.

<梵文の読み>ガテー ガテー パーラ・ガテー パーラ・サンガテー ボーディ スヴァーハー

<漢訳>掲帝 掲帝 波羅掲帝 波羅僧掲帝 菩提 僧莎訶

<筆者の和訳>達することよ、達することよ、目的(高み=サトリ)に達することよ、目的(高み=サトリ)にともに達することよ、サトリよ、成就あれ。

※この真言の和訳を「往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に全く往ける者よ、さとりよ、幸あれ」などと訳す(『般若心経 金剛般若経』(中村元・紀野一義訳註、岩波文庫))のは大まちがいである。仏教学界の大御所でもこんなまちがいを犯す。

※四回繰り返される「gate」を、『般若心経 金剛般若経』は「gatā」(「gam」(「行く」「動く」「去る」「～に達する」など)の過去受動分詞「gata」の女性形)だと見て、「往ける者」すなわち「人」の意味となっている。

ところが、「gate」は後ろにくる「bodhi」(「サトリ」)の言い換えである。「サトリ」は「人」ではない。だから「gate」は「gatā」ではなく、女性名詞「gati」(「行くこと」「行動」「退去」「往来」「成功」「獲得」「至」「到」「趣」(『梵和大辞典』)のvocative(「達することよ」)にとるべきである。従って、和訳語として「往ける者よ」は誤りである。

※また「gatā」にとった場合、単数形でいいのだろうかとは私は考える。言い換えれば、「サトリ」に向うのは、この真言の場合、一人でいいのかということ。この『般若心経』の「般若波羅蜜多」の(大乘の)自利利他円満の立場からして「みな、ともに」が担保されなければなるまい。もし「往ける者よ」がいいとするならば、「往ける者たちよ」(複数)にならなければ大乘経の価値がない。ここは「gate」が単数形であることから、「往ける者たちよ」(複数)にはならない。この点からも、私はやはり「達することよ」の「gati」にとった。

※ところで、「gati」にとると、三番目の「(pāra-)gati」は(複合語だから)いいとしても、四番目の「(pāra-)saṃgati」の「saṃgati」に「ともに達すること」という意味があるのかが問題となる。「saṃgati」には「～と会うこと」「～にしばしば行く」「交わり」「関係」「集り」「和合」といった意味があり「saṃgata(ā)」とほぼ同義である。従って私は大乘の立場を勘案し「(pāra-)saṃgati」を「目的(高み=サトリ)に、ともに達すること」とした。

※余談ながら、この「gate」を「gati」(女性名詞)や「gatā」(女性形)ではなく「gata」(男性形)だという信じられない参考書がある(真言宗智山派刊行の『常用陀羅尼と諸真言』(増補改訂版)、p. 13～p. 14)。いったい「gata」のvocativeは「gate」だろうか。この訳者は、もう一度サンスクリット文法を最初からやり直した方がいいようだ。「gate」は「gata」のlocative(「～において」「～で」「～に」)で

はないか。「～よ」とはならない。これは、サンスクリット文法の初歩の初歩のまちがいだ。サンスクリット文法の入門時に誰もが暗唱する男性名詞「*aśva*」(馬)の格変化を口にしてみればすぐわかる。※さて、もう一度「往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に全く往ける者よ、さとりよ、幸いあれ」という和訳。

まず「往ける者よ、往ける者よ(*gate gate*)」だが、これでは「去り行く者」「往生した者」「死んだ者」と誤解される。生半可な知識で『般若心経』解説を書いている人は、おおかたこの訳をすっかり信用し同じようなことを書いている。真言僧で、ある知名人が「去り行く電車のテールランプの光景」などとおよそ見当ちがいのことを言ったことがあるが、これもこの和訳を見て誤解したのだろう。

次に「彼岸に往ける者よ」(*pāra-gate*)だが、「*pāra*」をすぐに「彼岸」と和訳するのは安直である。「(般若)波羅蜜多」(*prajñā-pāramitā*)は「到彼岸」の意味であるから、「*pāra-gate*」も同じように「彼岸に往ける者よ」とするのは安易である。この『般若心経』のいう、大乘の「空」を内実とする「般若波羅蜜多」は、「く向こう岸」に渡る」という平面のベクトルではなく、小乗を批判してその上に立つ、もしくは靈鷲山の説法処からの俯瞰のように「空観」の高みに立つ垂直のベクトルである。サトリとはもともと「こちらからあちらへ往くこと」ではない。「生」から「仏」へ、また「因」から「果」へ、あるいは「異生羴羊心」から「秘密莊嚴心」へ、人間の心位が下から上に高まっていくことである。だから私は「目的(高み=サトリ)に達すること」と訳した。

仏教の最終目的である「サトリ(*buddhi, bodhi*)」が、人間(世間)の平行思考で会得できるものではなく、深い瞑想のなかで高度に研ぎ澄まされた垂直ベクトルの知(*prajñā*)によって示現することは瞑想修行の経験者にはわかるが、両先生の和訳からはそうした修行経験の気配がまったく感じられない。修行経験をぬきで、書齋で文献を相手に行われる場合の仏教研究には、ややもすると大きな落とし穴があることを銘記しておくべき事例である。

最後に「彼岸に全く往ける者よ」(*pāra-saṃgate*)だが、「*saṃgate*」を「全く往ける者よ」とするのはいかななものか。「全く(往ける)」とは「*gate*」の接頭語「*saṃ*」のことだろうが、「完全に」ということか? 「完全に往く」とはどんなことか? この「*saṃ*」こそ大乘の「みな、ともに」ではないか。一人が「完全に(自己完結的に)彼岸に往くこと」が『般若心経』の立場で「スヴァーハー」ではない。空海は「*pārasaṃgate*」(等等咒)を秘藏(密教のレベル)の真言と言った。この辺のことが、両先生は見えておられないようだ。この真言を「*pāramitā*」(到彼岸)の通俗的な語源解釈に従ったもの、という「岩波文庫」本の註記に至っては何をか言わんやである。

※空海は、「*gate*」を「大神咒」(声聞の真言)、「*gate*」を「大明咒」(縁覚の真言)、「*pāragate*」を「無上咒」(大乘の真言)、「*pārasaṃgate*」を「等等咒」(秘藏の真言)とし、その一が四つの真言の名を具すという密教的解釈を行っている。

このような解釈を「宗乘」的独善として退ける悪習が仏教学界にあるのはいかななものか。空海は唐で漢訳経のナマの現実をつぶさに見てきた。『般若心経』を師である惠果和尚や般若三蔵や牟尼室利三蔵やそのほか長安で交流した学問僧がどう解釈していたか知らないはずはない。仮に「宗」を立てるための教判的色彩があるとしても、その解釈には当時の最新の『心経』解釈情報が大師の頭のなかにはあったにちがいない。空海の解釈は、時間的には、玄奘三蔵訳の『般若心経』に近かったのである。

●おん あぼきやーべいろしゃのう まかぼだら まに はんどま じんばら はらはりたや うん  
Om amogha=vairocana mahāmudra[e] maṇi=padma jvala pravartaya hūṃ

<梵文の読み>オーム アモーガ・ヴァイローチャナ マハームドウラー マニ・パドゥマ・

ジュヴァーラ プラヴァルタヤ フーム

<筆者の和訳>オーン、あやまりなくたしかに世界のすみずみまで光り照らすものよ、大いなる印  
(に住するもの)よ、宝珠(智慧)と蓮華(慈悲)もつものよ、光り輝きたまえ、(その  
光を)めぐらしたまえ、フーム

※この真言は、真言宗系寺院において葬儀・法事の際によく読誦されている真言で、一般在家の檀信徒のなかにも諳んじている人も多い。『不空羅索毘盧遮那仏大灌頂光真言』(不空訳)や『不空羅索神変真言経』(菩提流支訳)に見られ、毘盧遮那如来すなわち大日如来の大灌頂光真言として説かれている。

※梵文中、「(mahā)mudra」(悉曇表記)の原語は「mudrā」で、そのvocativeは「mudre」であるので[e]を補っておいた。

※同じく梵文中、「jvala」はしばしば「jvāla」(名詞)と同義の「光明」の意味として「宝珠」「蓮華」「光明」と並べてとる和訳も見られるが、ここでは動詞「jval」の命令形(「光り輝きたまえ」)にとった。

※研究者のなかには、この真言の主尊を「宝珠と蓮華もつもの」から観世音菩薩にとる人もいるが、『不空羅索毘盧遮那仏大灌頂光真言』や『不空羅索神変真言経』を点検してみると毘盧遮那如来(大日如来)以外には考えられない。

## 5 諸仏の真言

### (1) 大日如来(金剛界)

●おん ばざらだと ばん

Om vajra=dhātu vaṃ

<梵文の読み>オーム ヴァジュラ・ダートゥ ヴァム

<筆者の和訳>オーン、金剛界(の主尊)よ、ヴァム

### (2) 大日如来(胎藏界)

●のうまく さまんだぼだなん あびら うん けん

Namaḥ samanta=buddhānāṃ a vi ra hūṃ khaṃ

<梵文の読み>ナマハ サマンタ・ブッダーナーム ア ヴィ ラ フーン カン

<筆者の和訳>遍き諸仏に帰依したてまつる、ア(地) ヴィ(水) ラ(火) フーン(風) カン(空)

### (3) 不動明王(慈求の咒)

●のうまく さまんだばざらだん せんだまかるしゃだ そわたや うん たらた かん まん

(のうまく さんまんだばざらだん せんだんまーかるしゃーだー そわたや うん たらたー  
かん まん)

Namaḥ samanta=vajrāṇāṃ caṇḍa=mahāroṣaṇa sphoṭaya hūṃ traḥ hāṃ mām

<梵文の読み>ナマハ サマンタ・ヴァジュラーナーム チャンダ・マハーローシャナ スポータヤ

フーム トウラット ハーム マーム

<筆者の和訳>遍き金剛(部の諸尊)に帰依したてまつる、悲憤による大忿怒をもつもの(不動明王)よ、(忿怒を)破裂させたまえ、フーム、(非法を)砕きたまえ、ハーム、マーム

(4) 釈迦如来

●のうまく さんまんだぼだなん はく

Namaḥ samanta=buddhānāṃ bhaḥ

<梵文の読み>ナマハ サマンタ・ブッダーナーム バハ

<筆者の和訳>遍き諸仏に帰依したてまつる、バハ

(5) 地藏菩薩

●おん か か か びさんまえい そわか

Oṃ ha ha ha vismaye svāhā

<梵文の読み>オーム ハ ハ ハ ヴィスマイェー スヴァーハー

<筆者の和訳>オーン、ハ ハ ハ、驚異なるのもの(地藏菩薩)よ、成就あれ

(6) 弥勒菩薩

●おん ばいたれーや そわか

Oṃ maitreyāya svāhā

<梵文の読み>オーム マイトレーヤ スヴァーハー (オーム マイトレーヤーヤ スヴァーハー)

<筆者の和訳>オーン、慈悲あるもの(弥勒菩薩)に、成就あれ

(7) 薬師如来

●おん ころころ せんだり まとうぎ そわか

Oṃ huru huru caṇḍālī mātaṅgi svāhā

<梵文の読み>オーム フル フル チャンダーリ マータンギ スヴァーハー

<筆者の和訳>オーン、取り除きたまえ、取り除きたまえ、チャンダーリー(薬師如来)よ、  
マータンギー(薬師如来)よ 成就あれ

※「caṇḍālī」は、「旃陀羅女」と訳される最下層のカーストに属する女性のこと。シュードラ(奴隷)の父とバラモン出身の母との間に生れた混血の種性で、インド社会では一般に侮蔑される。

※「mātaṅgī」も、「旃陀羅女」と訳される最下層のカーストに属する女性のこと。

※この真言では、このようなインド社会で身分の低い女性を薬師如来に重ねてみなしている。

(8) 観世音菩薩

●おん あろりきゃ そわか

Oṃ ārolik svāhā

<梵文の読み>オーム アーローリック スヴァーハー

<筆者の和訳>オーン、汚泥(より生ずるもの)＝蓮華(もつもの)＝観世音菩薩)よ、成就あれ

※「ārolik」は、「ālolik」(汚泥)に読む。

(9) 阿弥陀如来

●おん あみりたていせい から うん

Oṃ amṛta-teje hara hūṃ

<梵文の読み> オーム アムリタ・テーセー カラ フーム

<筆者の和訳> オーン、不死の威徳あるもの(阿弥陀如来)よ、(長寿を)もたらしたまえ、フーム

(10) 虚空蔵菩薩

●のうぼう あきやしやぎやらばや おん あり きやまり ぼり そわか

Namo ākāśa-garbhāya, Oṃ arikaḥ mari muri svāhā

<梵文の読み> ナモー アーカーシャガルバーヤ オーム アリカハ マリ ムリ スヴァーハー

<筆者の和訳> 虚空を蔵するもの(虚空蔵菩薩)に帰依したてまつる。オーム、アリカハ マリ ムリ  
成就あれ